

佳作

## ひいばあちゃん、ありがとう

愛媛県

上島町立岩城小学校 五年

田名後 友

「ひいばあちゃん、おはよう。」

朝、ぼくは、耳もとで言います。ひいばあちゃんは、耳が聞こえにくいので、大きい声で言います。すると、ひいばあちゃんは、

「とんちゃん、おはよう」

と言ってくれます。

ぼくが、朝起きて、一階へ下りてくると、ひいばあちゃんは、いつもの席に、いつものようにすわっています。そのすがたを見ると、ぼくは、ほっとするのです。

ぼくには、一才の弟がいます。ひいばあちゃんは、弟の遊び相手です。おもちゃで遊んだり、弟に合わせて会話を楽しんだりしています。弟とひいばあちゃんの年の差は、百もあります。ひいばあちゃんは、明治の終わりごろに生まれ、大正、昭和、平成と生きてきたのです。

ぼくとは、九十才も年の差があります。小さいころには、ベビーカーに乗せてもらい、いろいろな所を散歩しました。また、よくうですもうをしていました。ぼくが、三年生のころです。ぼくは、勝てるだろうと思っていたけど、負けてしまいました。

祖母や両親にしかられている時には、

「そんなにおこったらいかん。」

と止めてもくれます。また、げんかんのぼくたちのくつがみだれていると、ついで上手になおしてもらえます。このように、ひいばあちゃんは、ぼくたちのことを第一に考えてくれるやさしい気持ちの持ち主です。

ぼくが、とても感心するのは、毎日、毎日、ずっと新聞を書き写していることです。なんと二十六年間も続けているのです。ぼくは、すごいなあと思います。

このように考えると、ひいばあちゃんは、これまで、たくさんのお話を教えてくれていたことに気づきます。言いたいこともあっただろうに、それをあえて言わず、ぼくたちの気持ちが一番に考えてくれていたのです。そう思うと、「ありがとう。」の気持ちでいっぱいになります。つらいことがあっても、ひいばあちゃんのやさしさに包まれると、気持ちも軽くなり、それまでしんどかった心が、なんだかやさしくなるような気がするのです。ぼくにあって、弟にとつても、ひいばあちゃんは、心を勇気づけてくれる大切な人なのです。弟は小さいからまだわからないだろうけど、大きくなったら、ひいばあちゃんの心の大きさに気づくと思います。

ひいばあちゃん、いつもありがとう。これからも、ぼくをほっとさせるそんないでいてください。長生きしてください。ありがとう。